

エジプト学研究第 22 号 2016 年

The Journal of Egyptian Studies Vol.22, 2016

目次

〈序文〉	吉村作治	3
〈調査報告〉		
2015 年 太陽の船プロジェクト 活動報告	黒河内宏昌・吉村作治	5
第 23 次アブ・シール南丘陵遺跡調査概報	吉村作治・河合 望・近藤二郎・高宮いづみ・高橋寿光・竹野内恵太・山崎美奈子・福田莉紗	15
第 24 次アブ・シール南丘陵遺跡調査概報	吉村作治・河合 望・近藤二郎・高宮いづみ・柏木裕之・高橋寿光・米山由夏・松永修平・山崎世理愛	29
アブ・シール南丘陵遺跡第 23 次・第 24 次調査保存修復作業	苅谷浩子・柏木裕之・高橋寿光・河合 望・吉村作治	41
第 12 次アブ・シール南丘陵遺跡調査において出土した集団埋葬墓人骨の人類学的分析（予報）	坂上和弘・馬場悠男・平田和明	51
非破壊オンサイト蛍光 X 線分析によるアブ・シール南丘陵遺跡集団埋葬墓出土遺物の化学的特性化	阿部善也・大越あや・内沼美弥・扇谷依李	69
エジプト ダハシュール北遺跡調査報告—第 22 次調査—	吉村作治・矢澤 健・近藤二郎・柏木裕之・竹野内恵太・山崎世理愛	91
第 8 次ルクソール西岸アル＝コーカ地区調査概報	近藤二郎・吉村作治・菊地敬夫・柏木裕之・河合 望・高橋寿光・竹野内恵太・福田莉紗	113
〈論文〉		
エジプト先王朝時代ネケンにおける石製容器の穿孔法—石器使用痕観察と穿孔実験からの推定—	長屋憲慶	149
〈研究ノート〉		
古代エジプトの親族名称研究の現状と課題	齋藤久美子	167
画像資料からみたエジプト中王国時代の装身具研究序論	山崎世理愛	179
〈動向〉		
埃及学指南のための覚書	河合 望	205
〈活動報告〉		
2015 年度 日本エジプト学会活動報告		229
2015 年 エジプト調査		233

The Journal of Egyptian Studies Vol.22, 2016

CONTENTS

Preface	Sakuji YOSHIMURA.....	3
Field Reports		
Report of the Activity in 2015, Project of the Solar Boat	Hiromasa KUROKOCHI and Sakuji YOSHIMURA.....	5
Preliminary Report on the Twenty-Third Season of the Waseda University Excavations at Northwest Saqqara, 2014	Sakuji YOSHIMURA, Nozomu KAWAI, Jiro KONDO, Izumi TAKAMIYA, Kazumitsu TAKAHASHI, Keita TAKENOUCI, Minako YAMASAKI and Risa FUKUDA.....	15
Preliminary Report on the Twenty-Fourth Season of the Waseda University Excavations at Northwest Saqqara, 2015	Sakuji YOSHIMURA, Nozomu KAWAI, Jiro KONDO, Izumi TAKAMIYA, Hiroyuki KASHIWAGI, Kazumitsu TAKAHASHI, Yuka YONEYAMA, Shuhei MATSUNAGA and Seria YAMAZAKI	27
Preliminary Report on the Conservation Work at North-West Saqqara in 2014 and 2015 Seasons	Hiroko KARIYA, Hiroyuki KASHIWAGI, Kazumitsu TAKAHASHI, Nozomu KAWAI and Sakuji YOSHIMURA	41
Report on the Study of Human Skeletal Remains from the Multiple Burial in Northwest Saqqara, Egypt -Preliminary report-	Kazuhiro SAKAUE, Hisao BABA and Kazuaki HIRATA.....	51
Chemical Characterization of Artifacts Excavated from an Intact Multiple Burial at Northwest Saqqara by Nondestructive Onsite X-ray Fluorescence Analysis	Yoshinari ABE, Aya OKOSHI, Miya UCHINUMA and Eri OGIDANI.....	69
Preliminary Report on the Waseda University Excavations at Dahshur North: Twenty-Second Season	Sakuji YOSHIMURA, Ken YAZAWA, Jiro KONDO, Hiroyuki KASHIWAGI, Keita TAKENOUCI and Seria YAMAZAKI.....	91
Preliminary Report on the Eighth Season of the Work at al-Khokha Area in the Theban Necropolis by the Waseda University Egyptian Expedition	Jiro KONDO, Sakuji YOSHIMURA, Takao KIKUCHI, Hiroyuki KASHIWAGI Nozomu KAWAI, Kazumitsu TAKAHASHI, Keita TAKENOUCI and Risa FUKUDA.....	113
Articles		
Stone Vessel Drilling Method at Predynastic Nekhen, Hierakonpolis: Perspectives from Use-wear Trace Analysis and Experimental Drilling.	Kazuyoshi NAGAYA	149
Current Status and Issues of Kinship Terminology in Ancient Egypt	Kumiko SAITO	167
Introduction to a Study on Personal Adornments of the Middle Kingdom in Ancient Egypt through the Iconographic Analysis	Seria YAMAZAKI.....	179
Note on the current research tools for Egyptology.....	Nozomu KAWAI.....	205
Activities of the Society, 2015-16.....		229
Brief Reports of Fieldworks in Egypt, 2015.....		233

古代エジプトの親族名称研究の現状と課題

齋藤 久美子*

Current Status and Issues of Kinship Terminology in Ancient Egypt

Kumiko SAITO*

Abstract

The ancient Egyptian kinship system proposed by Franke in 1983 (Fig.1) has widely been accepted. The system was reconstructed based on the extended meanings of basic terms (e.g. *mwt* (mother) also referring to grandmother and *sn* (brother) also referring to uncle, cousin, and nephew), and characterized as symmetrical and bilateral. However, the compound kinship terms such as mother's mother (*mwt nt mwt*) and mother's brother (*sn n mwt*) were also used. The kinship system reconstructed based on these compound terms (Fig.2) is neither symmetrical nor bilateral, and can be classified as a bifurcate-collateral (Sudanese) system (Fig.3) in which all uncles, aunts, and cousins are referred to by different terms. In this article, I would like to argue how important it is to use the kinship system based on the compound kinship terms in order to study kinship, descent, and succession in ancient Egypt.

1. はじめに

古代エジプトの王位は、混乱期や他の家系の人物により篡奪された場合を除き、父から息子へ継承されていることが明らかな例が多く、基本的に父系継承であったと考えられている。第13王朝の王位は兄弟継承 (Bennett 1995:31) や循環継承 (Quirke 1991:138) であったとする説が提案されてはいるものの確実な根拠はなく、また、兄弟継承や循環継承も世代が移る際には、前任者の息子が継ぐことになり父系継承の一種である。王位以外の役人の職も、州候は王に任命されるものではあるが、父から息子へ引き継がれている場合も多く、「準世襲」であると言われている (Willems 2013:355)¹⁾。このように、王朝の断絶や失脚などが無い限り、父系での世襲が広く行われていたと考えることができる。一方、母親から土地を引き継いだ記録などから、女性にも土地の所有権があり、男女を問わず全ての子どもに相続権があったことが知られている (Robins 1993:127-135)。役職は父系継承で、財産は双系相続となる。父系、双系というところまず出自 (descent) が思い浮かぶが、これまでのエジプト学では出自ではなく、継承 (succession) や相続 (inheritance) が主に論じられてきた²⁾。

出自という用語はもともと、集団の成員権を限定する様式だけでなく、財産、地位、役職の譲渡の様式にも用いられていたが、リヴァーズは、集団の成員権の伝達に限って用いるべきであると提案した (Rivers 1926: 85-86; 渡邊 1982:167)。すべての子どもが父のリネージ³⁾に属するなら父系出自であり、母のリネージに属するなら母系出自となる。出自、継承、相続は必ずしも一致するわけではなく、母のリネージに属し

* 早稲田大学エジプト学研究所招聘研究員

* Invited Researcher, Institute of Egyptology, Waseda University

ていても、父の財産や役職を受け継ぐことができる場合もある（渡邊 1982:166-167）。古代エジプトの場合、継承や相続だけを研究すれば十分かというところではない。例えば、ある役職が兄弟間で継承されていた場合、前任者が父ではなく、母方のオジであれば母系継承の可能性はある。前任者との系譜関係が不明な場合、その一族が母系出自か父系出自かが問題となってくる。役職は父系継承であると考えられているため、出自も基本的に父系であると思われるが、中王国時代のステラに描かれる親族は母系に大きく偏っていることが指摘されており（Willems 1983:160; Lusting 1997:46）、出自については検討の余地がある。

古代エジプトの出自を考える際、親族名称は系譜の復原に役に立つだけでなく、それ自体も重要な意味を持つ。マードックはイトコ名称に基づいて親族名称体系を6類型に分類した（マードック 2001:266）。マードックは、親族名称体系の主な決定因子のなかで、出自規則と出自規則に基づき構成される親族集団が最重要であると考えている（マードック 2001:218）。そして、6つの親族名称体系と出自規則を組み合わせることで、社会組織の11の基礎類型を設定した。親族名称体系は、ある期間、まへの社会組織の形態を反映したまま続くことがあり（マードック 2001:264）、ひとつの親族名称体系に対応する出自規則はひとつではないが、親族名称体系と出自規則には関連があると考えているといえる。マードックの親族名称体系の分類は、イトコ名称という名称体系の一部に基づいているため、イトコ名称以外の部分が異なる名称体系も同一の型として分類されることから、名称体系の類型と社会組織の関連には批判的な見解もある（吉岡 1989:121; Keesing 1975:102）。しかし、特定の親族名称体系が、母系社会、あるいは父系社会に多いといった傾向があることは確かであり（Pasternak 1976:129-138）、筆者としては、親族名称体系は、出自とその変遷を反映していると考えている。特に、エジプト学では、人類学とは異なり実際に聞き取り調査により出自規則を明らかにすることができないため、親族名称は出自についての数少ない手がかりのひとつである。

このような立場で考えた場合、エジプト学におけるこれまでの親族名称体系の研究には出自の解明という視点が足りていなかったように思われる。そこで、本稿においてはこれまでの親族名称体系研究の問題点を明らかにし、今後の展望を示してみたい。

2. エジプト学における親族名称体系研究の問題の所在

古代エジプトの親族名称と言え、まっさきに思い浮かぶのがフランケにより示された親族名称体系の図（図1）であり（Franke 1983:163）、その後、それがそのまま引用されてきている（Lusting 1997:47; Campagno 2009:2⁴⁾）。この親族名称体系の特徴は、フランケ自身が記しているように、単独で用いられる基本用語の拡大された意味に基づいていることである（Franke 1983:163）。つまり、基本的にはキョウダイを示す *sn(t)* は、オジ、オバ、イトコ、甥、姪にまで、*it*（父）は祖父、*mwt*（母）は祖母、*s3(t)*（息子／娘）は孫にまで拡大して使われていた状態で親族関係を復原している。したがって、親族名称体系は「左右対称（symmetrical）」（父方と母方で同じ名称が用いられる）で「双系的（bilateral⁵⁾）」（父方と母方双方にたどれる）であり、親族を直系（両親と子ども）と傍系（キョウダイ、オジ、オバ、イトコ、甥、姪）に区別するものであると考えている（Franke 1983:161）。

しかし、実際には、オジを「父の兄弟、母の兄弟」、オバを「父の姉妹、母の姉妹」、甥を「兄弟の息子、姉妹の息子」、姪を「姉妹の娘」、平行イトコを「母の姉妹の娘」というように複合語として記した例がある（図2）。この場合、復原される親族名称体系は、フランケのいう「左右対称」で「双系的」とする特徴とは一致しない。

古代エジプトの親族名称は、基本用語の拡大の意味に基づいたものと、記述的な複合語により傍系親族を詳しく説明した親族名称に基づいたものと、2通りの体系が復原可能である。現状としては前者が一般的に

受けいれられているのであるが、出自に関して考察するのであればどちらがより適切であるかを、両者の違いを明らかにすることで見ていきたいと思う。

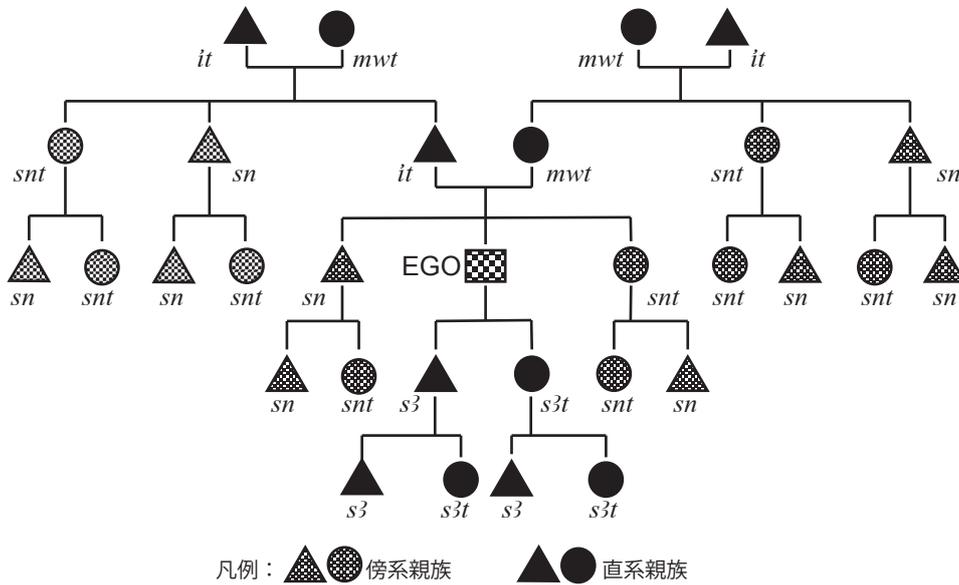


図1 フランケによる拡大された意味による親族名称体系 (Franke 1983: Fig. 3)

Fig.1 A Kinship system based on the extended meanings of basic terms

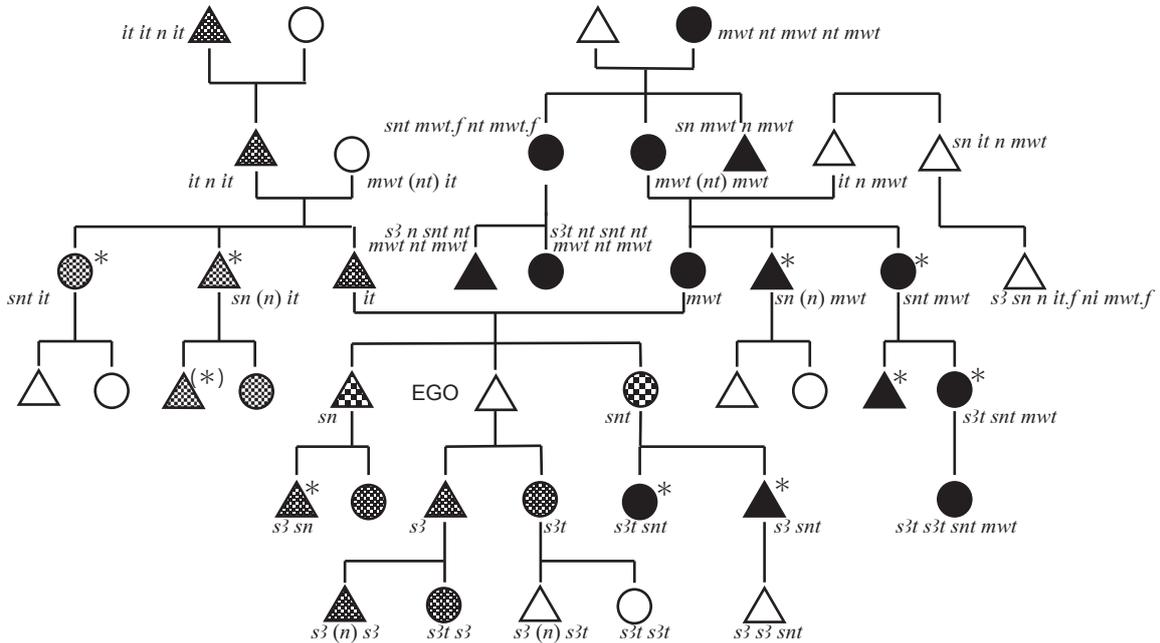


図2 フランケ (Franke 1983) により実際に報告例のある記述的親族名称による親族名称体系

Fig.2 A kinship system based on the compound terms reported by Franke

3. 類別的親族名称と記述的親族名称

一般に親族名称を論じる場合、類別的親族名称と記述的親族名称の違いに着目してさまざまな類型論が論じられてきた。両者の違いを初めて指摘したのはルイス・モーガンで、親族関係を記述的 (descriptive) と類別的 (classificatory) に分け、記述的親族名称体系では、父、母、息子、娘などの第一義の親族を示す名称を組み合わせるにより傍系の親族を表し、類別的親族名称体系では、記述的名称は用いず、親族のいくつかの範疇をまとめて大きなクラスとし、ひとつのクラスにひとつの名称を用いるものとしている (Morgan 1871:12)。記述的体系とされる英語などには、father's brother と mother's brother の2つのクラスをまとめて呼ぶ uncle のような類別的名称があるが、モーガンはこうした名称の利用は記述的体系の原則を犯すものではないと述べている (Morgan 1871:12)。モーガンの記述的親族名称体系とは、用いられる名称が記述的か類別的ではなく、直系親族と傍系親族 (父とオジ、母とオバ) が区別されているかであり、類別的親族名称体系とは、傍系親族が直系親族に組み入れられる体系である (Morgan 1871:13)。これに対し、マードックは「類別的」と「記述的」というのは、名称の体系全体 (whole systems of terminology) についてではなく、特定の名称 (particular terms) に関するものであるとしており (2001:131)、筆者もこれと同意見である。本稿では、「記述的 (親族) 名称」といった場合は、親族名称体系ではなく、第一義の親族名称を組み合わせた複合語による名称のことを、「類別的 (親族) 名称」といった場合は、キョウダイとイトコといった複数の範疇をまとめて呼ぶ名称のことを示すとす。したがって、古代エジプトの場合、第一義の親族名称を組み合わせた複合語による親族名称は記述的親族名称であり、キョウダイだけでなくイトコやオジ、オバにまで拡大されて用いられる場合の $sn(t)$ は類別的親族名称となる。

古代エジプトの親族名称研究の問題点は、ひとつの親族カテゴリーに記述的親族名称が用いられる場合と類別的親族名称が用いられる場合があるにも関わらず、類別的親族名称を基準に親族名称体系を論じてきたことにある。広く知られているマードックが設定した親族名称の6類型は、キョウダイ、平行イトコ、交叉イトコを区別するか、類別的親族名称によりひとつのカテゴリーにまとめるかの違いに基づいたものである (マードック 2001:265-266)。そこで、古代エジプトの親族名称体系の類型を考える際、キョウダイを表す $sn(t)$ がイトコやオジ、オバなどにも使われていたことに着目し、類別的親族名称の使用を特徴とする体系であると考えたのである。フランケによる親族名称体系では、 $sn(t)$ は全ての傍系親族をひとつのカテゴリーとして示す類別的親族名称と捉えられている⁶⁾。

しかし、ひとりの親族関係者に対し、単独語による類別的親族名称と複合語による記述的親族名称の両方を用いることはない。たとえば、父とオジが同一名称で呼ばれる社会では、人類学者に関係を尋ねられたような場合を除いて、「父のキョウダイ」という名称を用いたりしない。それは名称ではなく、説明である。親族名称はひとつのカテゴリーに対して与えられるものであるため、基本的に類別的親族名称を用いながら、気分によって時には記述的名称を用いるということではない。古代エジプトの場合は、記述的親族名称によりオジや甥、イトコがキョウダイとは区別されるということは、それぞれが個別のカテゴリーとして認識されていたことを示している。したがって、親族がいかにカテゴリー化されているかを示す親族名称体系の類型は記述的親族名称により決定すべきである。

では、なぜ、古代エジプトでは傍系親族に記述的親族名称と類別的親族名称の両方が用いられるのかを、次項で考えてみたい。

4. 親族名称と親族呼称

筆者は、古代エジプトにおける記述的親族名称と類別的な $sn(t)$ の使用の違いは、親族名称 (term of

reference) と親族呼称 (term of address) の違いではないかと考えている。親族名称とは、親族関係を指示するために使用することばであり、親族呼称とは、親族関係にあるものが互いに呼びかけるときに用いることばである (綾部 1960:95)。日本語の父、母、弟、イトコなどは名称であり、そのまま呼称として用いることはない。日本語ではキョウダイに対する呼称を、親族名称でのキョウダイの範囲を超えて用いる。例えば、イトコを「お兄さん」、「お姉さん」と呼ぶことがあるし、甥や姪が若い叔母を「お姉さん」と呼ぶことがある。「お姉さん」と呼ばれる全親族をひとつのカテゴリーにまとめてしまっただけでは、日本の親族関係の説明にはならないことは明らかであり、親族名称と親族呼称の区別は重要である。これは日本語に限らず、英語の“mother”は、名称としては実際の母親を指すが、呼びかけとしては継母や義母、親族以外の年配の女性にも用いられる (マードック 2001:129-130)。

古代エジプトの *sn(t)* が傍系親族 (オジ、イトコ、甥、姪) 以外にも用いられる例についてレヴェ (Revez 2003) がまとめている。本人と同等の立場にある人物に対する使用例として、愛の詩において恋人のことを意味し、第 18 王朝中頃以降、妻を示すために *hmt* の代わりに *snt* が使われるようになり、同僚の意味で使われることもあった (Revez 2003:124-125)。愛の詩では、「我が兄よ」と呼びかけで使われている例もある (Lichtheim 1976:183)。ウエストカーパピルスでは、スネフェル王が魔術師ジャジャエムアンフに「我が兄弟 (*sn.i*)」と呼びかけており (Revez 2003:125)、これも *sn* を呼称として用いている例である。このように、時として *sn(t)* が呼称として用いられていたことは確かである。

sn(t) は、墓の壁画やステラなどの葬儀の場面に描かれる傍系親族に用いられていたことから、祭事の際に接する機会のある傍系親族に用いられていたと考えられる。また、ラメセス朝時代の手紙に、「*sn.f*(彼の兄)」と記されている受取人が、実際はオジであるものもあり (Grdseloff 1940: 536)、日常的に交流のある親族に用いられていたことがわかる。記述的親族名称は複合語となるため長く、日常的に親族であることを示す簡便な呼称として *sn(t)* の利用が広まったのではないであろうか。記念物に記される場合、親しみを込めて日々の呼称にもとづいてその人物にラベルを付けたものと考えられる。あるいは、文字を記すことのできるスペースが限られるため、記述的親族名称ではなく親族呼称が好まれた可能性もある (Whale 1989:239)。

フランケも親族名称と親族呼称の違いには着目していた。単独語は親族と話している時に、親族呼称として、基本的な意味でも、拡大された意味でも使われ、複合語は親族名称として使われたと考えている (Franke 1983:176)。しかし、古代エジプトの親族関係の解明に役立つのは、単独語の拡大的な意味での使用であると考えており (Franke 1983:158)、筆者とは反対の考え方をしている⁷⁾。古代エジプトの親族名称体系は「左右対称」で「双系的」であるという結論に持っていきかけたからであろうか。しかし、呼称は親族のカテゴリーを越えて用いられる。拡大的な意味で用いられる *sn(t)* が親族呼称であるとするならば、それに基づく親族名称体系は、親族のカテゴリーを正確に描くことはできない⁸⁾。

5. 古代エジプトの親族名称体系の類型

つぎに、記述的親族名称により示される親族名称体系は、マードックによる類型のどれにあたるか考えてみたい。古代エジプトの親族名称体系は、これまでにハワイ型、カリエラ型、マジヤール型等言われてきているが (Allen 2000:144)、全て *sn(t)* の拡大された意味に基づくものである。フランケは、*sn(t)* の拡大の意味により親族名称体系を復原し、その特徴を双系的で、キョウダイとイトコは同一名称で呼ばれるとしているが、父とその兄弟、母とその姉妹が同一名称で呼ばれていないことからハワイ型ではないと判断し、特定の型に同定してはいない (Franke 1986: 1033)。

sn(t) をキョウダイの意味だけに限定した記述的親族名称でみると、全ての親族のカテゴリーに個別の

名称が与えられていることから、古代エジプトの親族名称体系はスーダン型（図3）となる（Pasternak 1976:135）。記述的名称を用いる場合のスーダン型は古代エジプトの記述的親族名称による体系の特徴と一致しており、これまでスーダン型という説が全く出てこなかったことは、いかに *sn(t)* の類別的使用にとらわれていたかを示している。

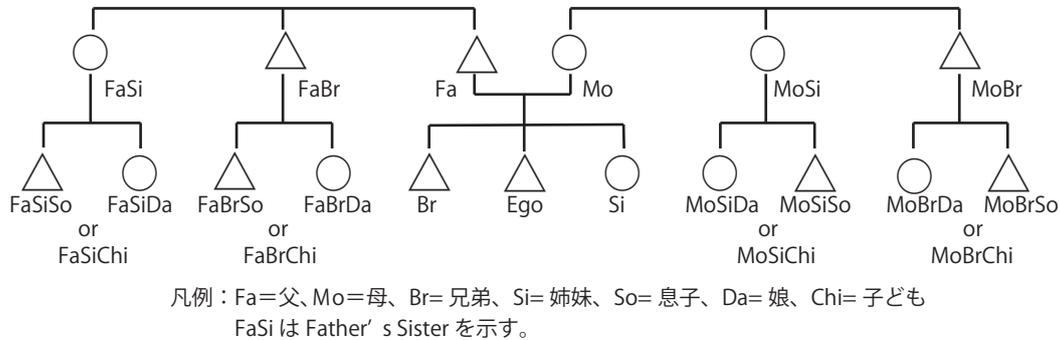


図3 スーダン型親族名称体系 (Pasternak 1976: Fig. 9-6)

Fig.3 A Sudanese kinship system

スーダン型親族名称体系を持つ社会は多くが父系出自である（36例中30）（Pasternak 1976:136）。しかし、なぜスーダン型親族名称体系が父系出自と結びつくのかは説明できていない（Pasternak 1976:136）。スーダン型親族名称体系は階層化され職業の専門化の進んだ、出自集団の果たす役割の大きい単系社会に見られるという（Pasternak 1976:142）。スーダン型は父系と母系を区別し、さらに直系と傍系を区別している。父系と母系を分けただけで、継承から傍系親族（イトコや甥）を除いた、父から息子への継承を反映したものかもしれない。王位の正統性を主張するためには、自分と兄弟だけでなく、イトコまでが「王の息子」と呼ばれたり、自分の息子だけに王位継承権があることを示したいのに、甥も「王の息子」と呼ばれたりする親族名称体系は王にとって好ましくない。世襲の王権や官僚制が整う過程で生まれてきた親族名称体系かもしれない。

今回、古代エジプトの親族名称体系はスーダン型にあたることを示したが、親族名称体系の類型はひとつの出自規則と結びつくわけではなく、スーダン型と結びつけられるからといって古代エジプト社会が父系出自であったと結論づけるつもりはない。類型の提示は、記述的親族名称による体系が *sn(t)* の拡大の意味による親族名称体系といかに異なるかを示したかったからである。なぜスーダン型の親族名称体系だったのかは今後の課題である。

6. 拡大の意味での *sn(t)* に基づく親族名称体系を用いることの問題点

拡大の意味での *sn(t)* に基づく親族名称体系を用いる問題点は、その双系的特徴から出自に関しても双系制を前提にしてしまうことである。ラスティングは、フランケによる双系的な親族名称体系が、双系社会に見られる個人的双系的キンドレッド（personal bilateral kindred）に類似しているとしている（Lusting 1997:48）⁹⁾。しかしキンドレッドの定義は幾通りもあり、注意が必要である。

キンドレッドとは、自己を中心とし、父方母方双方向的にたどる親族のカテゴリーであり（田中 1982:84）、父母を同じくするキョウダイ以外に同じキンドレッドの範囲を持つことはなく、父親がキョウダイであるイトコ同士でも、母を通じて別々のキンドレッドに属するため、キンドレッドは、交差し、重なり合う（マードック 2001:86-87）。キョウダイ以外一致しない双系の血縁集団として、単系の出自集団（リネージ）と区別するために、前者に対しリーチ（Leach）が「パーソナル・キンドレッド（personal kindred）」という用語

を提案した (Davenport 1959:563¹⁰)。父系出自のヌア族にも双系的親族関係¹¹が確認されるが、父系親族が圧倒的な重要性を持つことは明らかで、父系と母系が区別されない未分化の双系的キンドレッドとはいえないことから、フリーマンは単系出自社会の「キンドレッド」と双系社会に存在する未分化のキンドレッドは区別して考えるべきであることを指摘している (フリーマン 1981: 207-208)。壁画などから判断して、古代エジプトにも双系的な親族関係が存在したことは間違いのないと思われるが、それが単系社会のものか、双系社会のものかはわからない。ラスティングは、ダヴェンポートの双系社会における「パーソナル・キンドレッド」(Davenport 1959)を引用しており、(Lusting 1997:48)、また論調から判断して、双系社会のキンドレッドの意味で用いていると考えられる。

しかし、記述的親族名称による体系は双系的ではなく、親族名称体系を根拠に双系社会を前提にすることはできない。ラスティング自身、エゴを中心としたキンドレッドの存在がリネージ構造や祖先への関心を排除するものではないとしており (Lusting 1997:49)、単系的な特徴があることを認めている。先に述べたように、*sn(t)*の拡大的使用が親族呼称だとすると、親族呼称は交流のある親族は父方母方双方に及ぶことを示しているとは言えるが、出自規則とは区別して考えなければならない。記述的親族名称では父方と母方が区別されており、親族名称体系が双系的ではないことは、社会構造を考えるうえで重要である。完全に一致するわけではないが、父方と母方を区別する親族名称体系を持つ社会は単系出自と、区別しない親族名称体系を持つ社会は双系出自と相関関係が非常に強いことが指摘されている (中根 1960:93)¹²。記述的親族名称の存在を無視して、親族名称体系は双系的であるから出自も双系であると考えてしまつては、大きな見落としをしかねない。

7. 場面の人物構成に見る出自

壁画やステラに描かれた場面の人物構成を見てみると、双系的なもの、父系的なもの、母系的なものすべてが存在している。父系であれば父系リネージ成員 (父、父のキョウダイ、父方の平行イトコ、同父キョウダイ、子どもなど)、及び母と妻が描かれる¹³。父や妻、子どもが描かれず、母系リネージ成員 (母、祖母、母のキョウダイ、同母キョウダイ、母方の平行イトコ) が重視されていれば、母系の可能性がある (図2参照)。

フランケによる中王国時代の親族名称の研究では曾祖父と曾祖母に言及しているものはそれぞれ1例ずつしかないが、父方曾祖父に言及しているステラ (Franke 1983: 37, B16Leiden Nr.3) では父系リネージから外れる父方曾祖母は言及されず、母方曾祖母に言及しているステラ (Franke 1983:18, A34 Guimet C8) では母系リネージから外れる母方曾祖父には言及していない。前者は奉納者の曾祖父、祖父、父に対して捧げられた父系出自を表したもので (Franke 1983:56)、後者は父と妻が言及されておらず (Franke 1983:26)、母系傾向が強い。いずれも単系出自の可能性を示している。

フランケの研究によると、イトコであることが確認できた例は5例しかないが¹⁴、全て平行イトコである。イトコ自体の数が少ないとはいえ、交叉イトコが言及されていないことは、リネージ成員とはならない交叉イトコは記念物に記すほどの関係になかったことを示している可能性がある。双系であれば、平行イトコと交叉イトコの区別は無く、血縁としては等しい距離にあることから、この偏りは単系出自を思わせる。

中王国時代のステラに描かれた死者に対する祭祀の担い手について興味深い研究がある (Nelson-Hurst 2011)。第11王朝から第12王朝初期には、祭祀の担い手は75パーセントが息子で、兄弟は5パーセントであった。しかし、徐々に兄弟の割合が増え始め、第13王朝になると、息子が30パーセント、兄弟が42パーセントとその割合が逆転する。第11王朝には見られなかった姉妹が担い手である例も第13王朝には6パーセントとなる。この研究を行ったネルソン・ハーストは、第13王朝時代のある時期と第17王朝の大部分の

時期には、王位継承が兄弟継承 (fratrilineal) であり、兄弟や女性親族の重要性が増した結果、ステラでの祭祀の担い手も兄弟や姉妹が増加したと考えている (Nelson-Hurst 2011:24)。筆者としては、母系継承の可能性も考えている。母系社会では、まず同母兄弟が、続いて同母姉妹の息子 (甥) が後継者となるため、同母の兄弟姉妹が果たす役割は大きい。第13王朝のキョウダイ重視の傾向の理由を考えるには、ステラの持ち主と祭祀の担い手だけでなく、他に描かれる親族についても調べる必要があると思われる。ステラの人物構成が父系リネージ成員を中心としたものであれば兄弟継承、父系リネージ成員が除かれ母系リネージ成員を中心としたものであれば、母系継承の可能性が高くなる。こうした例も、記述的親族名称により、父系と母系を区別して出自を考察する必要性を示している。

古代エジプトには随所に単系原理が働いていると思われるが、現時点では筆者としても王朝時代を通じて双系社会はまったく無かったと言い切ることにはできない。実際、葬儀の場面などには、父方、母方双方の親族が描かれている例がある。双系的な人物構成の理由は3つ考えられる。ひとつは、父系でも母系でも本人にとって両親は重要で、記念物に両親の姿を描き、さらに両親の両親として祖父母が言及されるためである。両親が描かれていても双系出自とは限らない。もうひとつは、単系社会における双系的親族関係に基づき実際の祭祀の参加者を描いたためである。父系だからといって母方の親族とは全く関わらないということではない。どのような制度を持つ社会においても、オジ、オバは親しい人々であり、母方のオジと甥・姪の関係は多くの父系社会にも見られる特色であり、結婚式で重要な役割を持つことが知られている (中根 2002:101-102)。父方、母方双方の親族が描かれていても、双系出自とは限らないのである。しかし、3つ目として、実際に双系出自であった可能性も否定できない。第18王朝時代センネフェルには息子が無く、墓の壁画には、娘とその息子 (孫) が祭祀を行う場面が描かれており、男女を問わず直系子孫が死後の祭祀を担っている (齋藤 2013: 179)。父系制であれば息子がいない場合、後継者は兄弟や父系リネージに属するイトコ、甥となり、父系リネージに属さない娘の息子は後継者とはならない。娘とその息子に死後を託しているところが性別を問わず出自をたどる双系出自を思わせる。今のところ出自規則を確定するには情報および分析が足りないと言わざるを得ない。

王位は父系で継承されたことが明らかな時期が多いが、筆者は、第25王朝のヌビア人による王朝は母系制であったと考えており (齋藤 2014; Saito 2015)、明らかに王の父子関係が確認できていない時期には、他の原理が働いていた可能性がある。職業は父から息子へと引き継がれていても、王族やアメンの神官など特殊な立場にはない女性にも土地の所有権や相続権があったことが知られており (Robins 1993 : 127-136)、相続における双系性は出自の双系性に起因するものかもしれない。双系的な特徴は、単系出自社会に見られるものなのか、単系的な特徴は見られるものの基本は双系出自社会であったのか見極める必要がある。出自、相続、継承をそれぞれ区別して、記述的親族名称により細かく考察すれば、場面の人物構成からは出自に関する情報がまだまだ読み取れるはずである。

8. おわりに

本稿を通して主張したかったことは、古代エジプトの出自規則に関して考えるのであれば、拡大的意味での *sn(t)* に基づいた双系的な親族名称体系では不十分であるということである。1861年にバッハオーフェンが出版した『母権論』において、古代エジプトは母権制 (女性支配)¹⁵⁾ の具体例として論じられ (バッハオーフェン 1991)、また、かつて、第18王朝時代には王位は女系を通じて継承されていたという説が唱えられたこともあった¹⁶⁾。母権制も女系による王位継承も否定されてきたが¹⁷⁾、それ以来、父系制に基づく王権観と官僚制を前に、出自についてはあまり議論されていない¹⁸⁾。古代エジプトの図像には、父系だけでなく、

母系や双系と読み取れるものがある。今後は、記述的親族名称による親族名称体系に立ち返り、双系的というバイアスを外し、時代差、地域差に留意して、古代エジプトの出自規則、出自と継承や相続との関連について解明していく必要がある。出自規則の解明が、さらに、西アジアあるいはアフリカにおけるエジプトの位置づけの解明につながっていくものと考えている。

謝辞

査読者の方々より貴重なご指摘をいただきました。深く感謝申し上げます。

註

- 1) 古代エジプトの役職が全時代、全地域を通じて父系の世襲で行われていたかどうかはわからないが、父から息子へ引き継がれていた例は各時代のものが知られている。初期王朝時代から多くの役職が父から息子へ引き継がれていた (Trigger 1983:57)。第2 中間期のエルカブの墓の壁画から復原された家系図からは、州侯の職が父系で世襲されていることがわかる (Davies 2010:235, fig.10)。第20 王朝時代には役職に世襲の傾向が強くと見られると言われている (O'Connor 1983:229-230)。
- 2) 父系継承に言及した例: "In the better known periods of Egyptian history, succession to the throne was essentially patrilineal (Bennett 1995:28)."
- 3) リネージ (lineage) とは、一定の祖先を頂点として、それから派生した父系 (母系) の血縁につながる成員によって構成される範疇であり、その構成員がお互いの系譜関係をたどることのできる範囲に使われる。クラン (clan) は、必ずしも相互の系譜関係が把握できていなくても、同一祖先から派生したという認識をもっている人々の範疇をさす (中根 2002:94)。
- 4) 古代エジプトの親族名称の詳しい研究史は、Allen 2000 を参照されたい。アレンが親族名称研究の問題点と考えていることは、西欧の言語 (英語など) の親族名称を古代エジプトに用いることによって、西欧的な文化的意味や価値も押し付けてしまうことに対する危惧である (Allen 2000: 62-63)。アレンは古代エジプトの親族名称体系の類型の同定は今後の課題としている (Allen 2000:62)。親族名称の代表的な研究といえばロビンスの考察が挙げられ、各親族名称が単独または複合語でどのような意味で使われたかまとめているが、親族名称体系の類型の同定は行っていない (Robins 1979)。ウィレムスもフランケとほぼ同時期に親族名称の研究をしており、父と母は祖先に、息子と娘は子孫に拡大して用いられ、*sn(t)* は全ての傍系親族を示すと考えており (Willems 1983)、フランケの説に同意している (Willems 1985:186)。第18 王朝時代の家族について考察したウェイルも、フランケの単独で用いられる基本用語の拡大的な意味を引用している (Whale 1989:240)。
- 5) 本稿では、bilateral を「双系」と訳すことにする。他に、nonunilineal は「非単系」、cognatic は「共系」、bilineal は「両系 (二重単系)」と区別して考えている。ただし、「非単系」、「共系」は一般になじみの無い表現であるため、父方にも母方にもたどれる非単系の出自の意味で「双系」を用いる。日本は父系でも母系でもない双系社会と言われており (中根 2002:91)、イメージし易いと考えた。
- 6) 複数の親族関係をひとつのカテゴリーにまとめる際には、ルールがあるはずであるが、全ての傍系親族をひとつのカテゴリーとして扱う理由は説明されていない。アレンは古代エジプトの親族名称は「記述的」に用いられるが、親族名称体系は類別的であると述べている (Allen 2009: 53)。アレンは、類別的名称体系では、父の兄弟は父と同じ名称で呼ばれ、母の姉妹は母と同じ名称で呼ばれ、したがって、父や母と呼ばれる人の子どもはイトコであってもキョウダイと呼ばれることを特徴としていると述べている (Allen 2009:54)。しかし、続いて彼のまとめた親族名称では、父の兄弟は父 (*it*) ではなく兄弟 (*sn*) と呼ばれ、母の姉妹は母 (*mwf*) ではなく、姉妹 (*snt*) と呼ばれており (Allen 2009:54)、類別的名称体系の説明で挙げたルールと一致していない。ウィレムスは、古代エジプトの親族名称体系は「世代を超えて拡大する規則を持つ体系 (Systems with intergenerational extension rules)」と一致すると考えているが (Willems 1983:162)、そのシステムにしても、世代が違っても同一名称で呼ばれる親族はいるが、傍系親族の全てが同一名称で呼ばれるわけではない (Scheffler 1972: 121-122)。
- 7) ウェイルもフランケと同意見で、おそらくスペースが限られるために複合語は墓では稀にしか使われないことから、古代エジプトの家族を理解するためには、基本的な親族名称の拡大された意味での使用を認識することが大切であるとしている (Whale 1989:239)。確かに、拡大された意味が何を示しているかを確認することは大切であるが、親族名称体系に反映された親族構造を理解するという立場からは、やはり記述的親族名称による親族名

称体系の方が意味がある。

- 8) マードックも、親族の分析には、親族名称 (term of reference) の方が有益であると述べている (マードック 2001:130)。
- 9) ラスティングが、親族名称体系が双系的であるため、双系のキンドレッドであると述べている部分 (Lusting 1997:48) は難解である。以下に筆者の解釈を述べる。ラスティングは、フランケによる親族名称体系は、実例により証明されていない部分も含めて、双系的であるとしていることを認めつつ、古代エジプトの親族名称は非単系 (nonlinear) と言われるものと考えている。非単系な親族名称体系では、父方親族と母方親族を名称で区別しない (父方オジと母方オジは同じ名称で呼ばれる)。双系的という特徴を人類学用語の非単系に置き換えたものである。続いて、親族名称体系が非単系だからといって、出自も双系とは限らないとしながらも、古代エジプトでは相続が双系で、息子だけでなく娘にも両親との系譜関係が記されることを指摘し、したがって双系出自であるということかと思うと、継承や相続の原則はコンテキストにより異なるため、親族集団の性質は完全には理解できないと述べる。しかし、キンドレッドは父方母方双方に遡るとは限らず、祖先を中心に出自を辿るグループでも双系的に成員を確保する例があることを指摘し、後者がエジプトに当たると考えているように思われる。続いて、古代エジプトの理想的な (実例の無い部分を補った、つまり双系的なという意味) 親族名称体系は、personal bilateral kindred に一致するという議論に移る。結果的に、親族名称体系が双系的であることから、双系的なキンドレッドを発想したと思われる。
- 10) 今回、リーチの著書 (*Social Science Research in Sarawak. Colonial Research Studies*, no.1, Colonial Office: London,1950) を参照することができなかったため、Davenport (1959) を引用した。
- 11) ヌア族の報告を記したエヴァンス・プリチャードは、共系的親族関係 (cognatic kinship) という用語を用いているが (フリーマン 1981 原著 204 頁)、cognatic を bilateral の意味で用いているので、本稿で用いている bilateral の訳語に合わせて「双系的親族関係」とした。
- 12) マードックは、親族名称体系は、居住規則が変わり、拡大家族やクランの形態が変化してもしばらくの間、以前の社会組織の形態を反映したまま続くことがあると指摘している (2001:264)。したがって、親族名称体系と社会構造は完全には一致しないが、相関関係は無視できない。マードックの World Ethnographic Sample (Murdock 1957) によると、父方と母方のオジとオバを区別する分岐融合型親族名称を用いる社会には単系出自社会が多く、父方と母方のオジとオバを区別しない世代型または直系型親族名称を用いる社会には非単系出自社会が多い (Pasternak 1976:131-138)。
- 13) 父系制であっても、生母と、子孫を残すために必要な妻は重要なため、描かれると思われる。
- 14) Franke 1983 のデータ E40 (sn で母の姉妹の息子)、データ F8, F9, F19 (snt で母の姉妹の娘)、D10 (s3t snt mwt で母の姉妹の娘)。
- 15) 母権制とは、女性が政治的権力を独占している社会である。一方、母系制では、子どもはすべて母の血縁成員権を継承し、財産は母から娘へと相続されるが、女性は家長としての権限を持たず、また、政治的な役職はすべて男性が務めるのが常である。財産の管理運営は男子が当たり、この管理運営権はその男子の姉妹の息子によって継承される。社会人類学による科学的調査が行われるようになって以来、世界のどこにも母権制の社会は見出されていない (中根 2002:83-89)。
- 16) 王位の女系継承とは “heirss” theory と呼ばれるもので、王は先王と正妃の息子であっても、先王と正妃の娘 (つまり姉妹)、“heirss”、と結婚して初めて王位の正統性が認められるというものである (Robins 1983:67)。“heirss” の地位は母から娘へと引き継がれるため、女系継承となる。第 18 王朝初期の王家における兄弟姉妹婚を説明するために生まれた説と思われる。王位の女系継承が述べられている例および反証は、ロビンスの論考 (Robins 1983) を参照されたい。
- 17) トリガーは、「初期のエジプト学者は、当時の進化論の影響から、エジプト社会における双系的な親族構造と女性の高い地位を、母系制であると愚かにも誤って判断した」と述べている (Trigger 1968:51)。
- 18) 筆者自身、美術様式に基づき古代エジプトは家父長制であると論じたことがある (齋藤 2011)。しかし、今は、家父長制は王族や官僚など上層階級の理想とする姿であり、規範として図像により流布されたが、社会の下層にまで完全に浸透していたかは問い直す必要があると思っている。

参考文献

Allen, T. D.

2000 “Problems in Egyptology: Ancient Egyptian Kinship,” *Journal of Black Studies* 31 No.2, pp.139-148.

- 2009 *The Ancient Egyptian Family: Kinship and Social Structure*, New York and London: Routledge.
- Bennett, C.
1995 “The Structure of the Seventeenth Dynasty,” *Göttinger Miszellen* 149, pp.25-32.
- Campagno, M.
2009 “Kinship and Family Relations,” in E. Frood and W. Wendrich eds. *UCLA Encyclopedia of Egyptology*, eScholarship University of California,
<http://escholarship.org/uc/item/7zhlg7ch>. (参照 2014 年 9 月 16 日)
- Davenport, W.
1959 “Nonunilinear Descent and Descent Groups,” *American Anthropologist* 61, pp.557-572.
- Davies, W. V.
2010 “Renseneb and Sobeknakht of ElKab: The Genealogical Data,” in M. Marée ed. *The Second Intermediate Period (Thirteenth-Seventeenth Dynasties): Current Research, Future Prospects*, London: Peeters, pp.223-240.
- Franke, D.
1983 *Altägyptische Verwandtschaftsbezeichnungen im Mittleren Reich*, Hamburg: Verlag Borg GmbH.
1986 “Verwandtschaftsbezeichnungen”, in H. W. Helck and E. Otto eds. *Lexikon der Ägyptologie* VI, Wiesbaden: Harrassowitz, cols.1032-36
- Grdseloff, B.
1940 “Une Missive Minuscule de Deir el Médineh,” *Annales du Service des Antiquités de l'Égypte*, Kairo 40, pp.533-536.
- Keesing, R. M.
1975 *Kin Groups and Social Structure*, New York: Holt, Rinehart and Winston.
(『親族集団と社会構造』小川正恭、笠原政治、河合利光訳、未来社、1982)
- Lichtheim, M.
1976 *Ancient Egyptian Literature Volume II: The New Kingdom*, Berkeley, Los Angeles, London: University of California Press.
- Lusting, J.
1997 “Kinship, Gender and Age in Middle Kingdom Tomb Scenes and Texts,” in J. Lusting ed. *Anthropology and Egyptology: A Developing Dialogue*, Monographs in Mediterranean Archaeology 8, Sheffield: Sheffield Academic Press, pp.43-65.
- Morgan, L. H.
1871 *Systems of Consanguinity and Affinity of the Human Family*, Washington, D. C.: Smithsonian Institution.
- Murdock, G. P.
1957 “World Ethnographic Sample,” *American Anthropologist* 59, pp. 664-87.
- Nelson-Hurst, M. G.
2011 “‘...Who causes his name to live’ the Vivification Formula through the Second Intermediate Period,” in Z. Hawass and J. H. Wegner eds. *Million of Jubilees: Studies in Honor of David P. Silverman*, vol.2, Cairo: The American University in Cairo Press, pp.13-31.
- O'Connor, D.
1983 “New Kingdom and Third Intermediate Period, 1552-664 BC,” in B. G. Trigger, B. J. Kemp, D. O'Connor, A. B. Lloyd eds., *Ancient Egypt: A Social History*, Cambridge: Cambridge University Press, pp.183-278.
- Pasternak, B.
1976 *Introduction to Kinship and Social Organization*, Englewood Cliffs, New Jersey: Prentice-Hall, Inc.
- Quirke, S.
1991 “Royal Power in the 13th Dynasty,” in S. Quirke ed. *Middle Kingdom Studies*, New Malden: SIA Publishing, pp.121-139.
- Revez, J.
2003 “The Metaphorical Use of the Kinship Term *sn* “Brother”,” *Journal of the American Research Center in Egypt* 40, pp.123-131.
- Rivers, W. H. R.
1926 *Social Organization*, London: Kegan Paul.
- Robins, G.
1979 “The Relationships specified by Egyptian Kinship Terms of the Middle and New Kingdoms,” *Chronique d'Égypte* 54, pp.197-217.
1983 “Critical Examination of the Theory that the Right to the Throne of Ancient Egypt passed through the Female Line in the 18th Dynasty,” *Göttinger Miszellen* 62, pp.67-77.

- 1993 *Women in Ancient Egypt*, London: British Museum Press.
- Saito, K.
2015 “The Matrilineal Royal Succession in the Empire of Kush: A New Proposal Identifying the Kinship Terminology in the 25th and Napatan Dynasties as that of Iroquois/Crow,” *Mitteilungen der Sudanarchäologischen Gesellschaft zu Berlin e.V.* 26, pp.233-244.
- Scheffler, H. W.
1972 “Systems of Kin Classification: a Structural Typology,” in P. Reining ed. *Kinship Studies in the Morgan Centennial Year*, Washington, pp.113-133.
- Trigger, B. G.
1968 *Beyond History: The Methods of Prehistory*, Studies in Anthropological Method. New York and London: Holt, Rinehart and Winston.
1983 “The Rise of Egyptian Civilization,” in B. G. Trigger, B. J. Kemp, D. O’Connor, A. B. Lloyd eds. *Ancient Egypt: A Social History*, Cambridge: Cambridge University Press, pp.1-70.
- Whale, S.
1989 *The Family in the Eighteenth Dynasty of Egypt: A Study of the Representation of the Family in Private Tombs*, The Australian Centre for Egyptology: Studies 1, Sydney: The Australian Centre for Egyptology, Macquarie University.
- Willems, H.
1983 “A Description of Egyptian Kinship Terminology of the Middle Kingdom, c.2000-1650 B.C.,” *Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde* 139, pp.152-168.
1985 Review, “Franke, Detlef, *Altägyptische Verwandtschaftsbezeichnungen im Mittleren Reich*, Hamburg, Verlag Born GmbH, 1983, ISBN 3-921598-13-3,” *Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde* 141, pp.186-188.
2013 “Monarchs and Local Potentates: The Provincial Administration in the Middle Kingdom,” in J. C. Moreno Garcia ed. *Ancient Egyptian Administration*, HdO 104, Leiden and Boston: Brill, pp.341-392.
- 綾部恒雄
1960「親族名称」『現代文化人類学3 人間の社会I』泉靖一、中根千枝編、中山書店、pp.95-114, 234-242.
- 齋藤久美子
2011「視覚化された女性の劣位：古代エジプト美術に見るジェンダー表現」『エジプト学研究』17号、早稲田大学エジプト学会、pp.89-98.
2013「古代エジプト子どもの図像学」『永遠に生きる—吉村作治先生古稀記念論文集』、吉村作治先生古稀記念論文集編集委員会編、中央公論美術出版、pp.173-183.
2014「古代エジプト第25王朝の王位母系継承を考える—親族名称に基づく新提案—」『オリエント』第56巻第2号、日本オリエント学会、pp.53-64.
- 田中真佐子
1982「出自と親族」『現代の文化人類学〈3〉親族の社会人類学』渡辺欣雄編、至文堂、pp.83-108.
- 中根千枝
1960「親族と血縁集団」「単系血縁集団」「非単系血縁集団」『現代文化人類学3 人間の社会I』泉靖一、中根千枝編、中山書店、pp.54-94, 229-234.
2002『社会人類学：アジア諸社会の考察』講談社学術文庫.
- バツハオーフェン, J. J.
1991『母権論』岡道男、河上倫逸監訳、みすず書房。
(原著 J.J. Bachofen, *Das Mutterrecht: eine Untersuchung über die Gynaiokratie der alten Welt nach ihrer religiösen und rechtlichen Natur*. Stuttgart: Verlag von Kraiss und Hoffmann, 1861)
- フリーマン, J. D.
1981「キンドレッドの概念について」小川正恭訳『家族と親族』村武精一編、未来社、pp.199-229
(原著 J. D. Freeman, “On the Concept of the Kindred,” *Journal of the Royal Anthropological Institute* 91, 1961, pp.192-220.)
- マードック, G.P.
2001『新版社会構造：核家族の社会人類学』内藤莞爾監訳、新泉社。
(原著 G. P. Murdock, *Social Structure*, London, 1949)
- 吉岡政徳
1989「縁組と親族」『現代社会人類学』合田濤編、弘文堂入門双書、pp.97-125.
- 渡辺欣雄
1982「Descent 理論の系譜—概念再考—」『武蔵大学人文学会雑誌』13-3, pp.128-172.

エジプト学研究 第22号

2016年3月31日発行

発行所 / 日本エジプト学会

〒169-8050 東京都新宿区戸塚町1-104

早稲田大学エジプト学研究所内

発行人 / 吉村作治

The Journal of Egyptian Studies No.22

Published date: 31 March 2016

Published by The Japan Society of Egyptologist

1-104, Totsuka-chyo, Shinjyuku-ku, Tokyo, 169-8050, Japan

© The Japan Society of Egyptologist